

企画セッション「モチベーションを高める教室実践 －交換留学生のグループプロジェクト活動例から－」

話題提供者：武田誠（早稲田大学）

佐藤正則（めいと日本語学院）・小川誉子美（横浜国立大学）・久野由宇子（東海大学）

1. 本企画の趣旨

学習者のモチベーションをどのようにして高めるかという問題は、教育現場の違いを超えた普遍的なテーマである。そこで、委員企画セッションAでは、早稲田大学の武田誠氏を話題提供者に迎え、「モチベーションを高める教室実践」というテーマで活動を行った。大学、日本語学校、年少者教育等の教師を中心に23名の参加者があり、学習者のモチベーションというテーマに対する関心の高さがうかがわれた。

このセッションの議論を方向づけるものは、デシ(Deci, 1985)とライアン(Ryan, 2000)の「自己決定理論」である。その中の「基本的心理欲求理論」では、人が自己実現し、精神的に健康で幸福を感じる要件を、1)「関係性の欲求」、2)「有能さへの欲求」、3)「自律性の欲求」の3点が適度に充足されることとしている。本セッションでは、これらの要件、中でも特に3)「自律性の欲求」に焦点を当てた。教師は授業を計画するにあたり様々なことを決めてしまいがちであるが、学習者の側に選択肢や決定権をできる限り与えれば、自律性の欲求はより充足される。つまり、学習者への権限移譲を授業デザインに取り入れることが、モチベーションを高めるのに役立つ可能性がある。モチベーションといえば「やる気のない学習者をどう変えるか」という議論になりがちであるが、あえてその方向からではなく、実践者が自らの授業を振り返り、デザインを変えることによって、活力のある授業を展開する方法を考えることが、本セッションの目的であった。

2. セッションの流れ

まず、話題提供者の武田氏から、デジとライアンの自己決定理論におけるモチベーションのとらえ方についての解説と、大学における交換留学生のグループプロジェクト活動の実践報告が行われた。氏の実践は、短期の交換留学生を対象とした授業で、大学周辺の生活地図を作成するグループプロジェクトを行い、協働的な学びのプロセスの中で日本語運用力の獲得を目指すというものであった。グループメンバーの選定、地図のテーマや作成方法の決定を学習者に委ね、なおかつ作業の過程で獲得した語句の小テストにおいても、出題する語の選択を学習者に行わせるなど、意識的に学習者への権限移譲を取り入れた。その結果、「自律性の欲求」にとどまらず、「関係性の欲求」、「有能さへの欲求」がどのように満たされたていったかが具体的に示された。

続く参加者間の議論は、5つのグループ（1グループ4～5人）で行った。まず、アイスブレーキングを兼ねた自己紹介として、自分自身のモチベーションが上がること、上がらないことを紹介しあった。次に、各自で日ごろの実践を振り返り、動機づけの成功例・失敗例を付箋紙に書き出し、「基本的心理欲求理論」の3つの要件のどれにかかわる事例であったかをワークシート上にマッピングした。それをグループ内で共有したうえで、「自律性の欲求」に関係する動機づけの失敗例をグループで一つ選び、欲求を満たす方向で改善

できることは何かを話し合い、改善された活動案をポスター化した。最後に各グループの代表者がポスターに基づいた発表を行い、成果を全体で共有した。

3. セッションの様子と参加者の声から

グループワークは終始活発に行われ、多様な現場や視点を反映した発表が行われた。例えば、日本語学校のクラスで一つの単語から連想できる語の数を競わせるゲームをしたところ活動が停滞した事例について、語彙集めのテーマやゲームのルールを学生に決めさせるという改善案が出された。また、プレゼンテーションの課題について、学生に任せておくと出来上がらないが教師が介入すると教師の作品になってしまうという事例について、忍耐強く待つ、あえて一度失敗させる、活動の全体像を可視化するなど、教師の姿勢に関する改善案が出された。

一方で、グループによっては、参加態度に極端な問題のある学習者を抱える現場や、課題のテーマや難易度を学習者の多様性に合わせる余裕のない現場の状況そのものが議論の中心となったところもあった。現実にもティベーションの問題に直面した場合、自己決定理論の観点だけからは説明しきれないことも多く、特に今回「自律性の欲求」に焦点を絞ったことで、そこに当てはめて考えることが困難な事例もあったようだ。

事後のアンケートには、「理論的な学びになった」「実践の参考になった」という評価が見られた一方で、「自律性の欲求だけに絞られたため想定内の結論になってしまい自由な議論がしにくかった」という意見もあった。さらに、企画者側で「そもそもやる気のない学生」に教師が直接介入し改善するのは困難と考え、教師サイドの授業デザインの改善に焦点を当てることを最初に伝えていたが、「そもそもやる気のない学生をどうするかが差し迫った問題であり、これについてあまり触れられなかったのが残念」との声もあった。

4. おわりに

モチベーションというテーマは、現場の教師が必ず直面する問題であり、参加者のニーズに直結した企画であったと思う。学習者への権限移譲を授業デザインに取り入れるという発想は、モチベーションを上げる方法の選択肢の一つとして、参加者に持ち帰られたことと思う。また、普段自分が心を悩ませている問題について、現場の異なる教師と意見を交わし、共有できたという点においても意義あるセッションだったのではないだろうか。クラス編成等、機関の運営上の制約や、自身の立場上の制約など、難しい状況はどの現場にもある。そうであればあるほど、状況を客観的に見極め、できることを実践する力が求められる。そのような力を互いに育てあうために今後どのような企画が可能か、委員で検討を重ねていきたい。

(文責：佐藤正則)

参考文献

- (1) Deci, E. L., & Ryan, R. M. (1985). Intrinsic motivation and self-determination in human behavior. New York: Plenum Press.
- (2) Ryan, R.M., & Deci, E.L. (2000). Self-determination theory and the facilitation of intrinsic motivation, social development, and well-being. American Psychologist, 55, 68-78.